アムステルダム, ムゼウムプレインに見る首都における文化中心としての 都市空間に関する20世紀後半の議論

THE MUSEUMPLEIN IN AMSTERDAM, THE DISCUSSION ON THE LANDSCAPE OF A CULTURAL CENTER IN THE CAPITAL IN THE SECOND HALF OF TWENTIETH CENTURY

田村 望*

Nozomi TAMURA

The Museumplein in Amsterdam is indicated one of a potential contact points to load the Amsterdam brand. This place was born by the movement to gain the impressive cityscape as a European Modern Capital in the late nineteenth century. After the discussion on the meaning and the design for more than one century, this place was opened as the Museumplein at the end of the twentieth century. The center of the discussion was sifted from elite and bourgeois to civilized masses after the Second World War. The Constant's New Babylon become popular in the 1960s and his antipathy toward both avant-garde art and functional architecture which he regarded as elitist attempt to rob play and creativity from "the mass" had gained attention. The character as a cultural center in the city was intensified in the 1970s to 1980s. The possibilities of cycling and rambling and the cultural function of the free manifestation were required. The newspapers heated up the discussion. The final landscape design of the Museumplein was evaluated because of the "Emptiness", the "Neutrality" and the preservation of the developed character by the early second half of the 20th century. This place, the Museumplein, gains the centrality and is not any more the back yards of the cultural institutes. No institute can be a zenith there. The new national cultural public space is require to equally accept the various level of the urban elements and activities and return them to the city again.

Keywords: the Netherlands, Urban Landscape Design, Constant's New Babylon, Museum Square

オランダ、都市のランドスケープデザイン、コンスタンの新バビロン、ミュージアム広場

1. はじめに

1-1. 研究の目的

アムステルダムの中心部にあるムゼウムプレイン¹⁾ (以下 AMP, Fig. 1) は、現在アムステルダムの観光と文化をアピールする拠点の上位に位置づけられている²⁾。よく広場らしい広場が無いと表現されるオランダの都市であるが、AMP は開放的なオープンスペースで、国民的、国際的な行事やデモ会場にもなり、年間を通じて使用される国民的都市空間である。AMP は 19 世紀後期にその端を発し、当時のオランダを代表する建築文化財に囲まれた場所だが、19 世紀に多くの欧州の首都が求めた近代都市の記念碑的な表現は欠如している。この場所がどうあるべきかの議論は、19 世紀末から約 1 世紀に渡り続いた。その末 AMP は 1999 年にデンマークを拠点にするランドスケープアーキテクト、アンデルソン (Sven-Ingvar Andersson) の設計でオープンした。20 世紀末、新ミレニアムへ向けての文化施設の改装を含むこの場所の改装・更新計画では、AMP のランドスケープデザインが最重要視された。この場所に提案されたほとんどの計画は実現しなかったが、建築運動、都市化、造園文化の相互関係の中で展開するオランダ近現代ランドスケープデザインの変遷を見る端緒としても興味深い対象である³⁾。19 世紀後期と 20 世紀後半の提案や議論、結果としての AMP を見ると都市の文化中心的空間に対する考え方、求める象徴性、表現方法などが変化する。本研究は 1 世紀以上に渡るこの場所の議論の過程を明らかにしながら、この場所の意味や文化を司る都市空間に求められるものが、どのような社会

Fig. 1 ムゼウムプレインの
鳥瞰写真 2006 年(ステイデルック・
ムゼウム拡張計画案部分含む)

B 方向が北、C 方向が南。

A. ムゼウムプレイン (AMP) 1999 年開園

B. 国立博物館 (RM) 1885 年開館

C. コンセルトヘボウ (CG) 1888 年開館

D. ステイデルック・ムゼウム (SMA)

1895 年開館

E. ファン・ゴッホ美術館 (VGM)

1973 年開館

e'. ファン・ゴッホ美術館 (VGM) 新棟

1999 年開館

X. ドンキーイヤー

Y. 美術館の小さな森

* 本論文中の図版の記号 A, B, C, D,

E, e', X, Y. は上記の文化施設を示す。

状況や芸術的背景によって変化し、その何が受け継がれ、AMP のデザインに反映されたのかを明らかにすることを目的としている。前稿⁴⁾では、この空間の在り方の議論を、アムステルダムに欧州近代首都としての文化的空間を獲得させようという動きと合わせて 19 世紀後期を中心に考察した。本稿はこの場所の在り方の議論が再燃した 20 世紀後半に注目する。19 世紀的概念では市民と認められなかった人々を含めた大衆⁵⁾が、都市における建築や都市景観の決定に関与し始めることにより、議論の拡大と決定プロセスにも変化があると考えられる。20 世紀後半のこの議論がどのように展開し、どのような最終的な計画に繋がったのかを明らかにすることを目的とする。

* 早稲田大学理工学総合研究センター
客員研究員・工修(早稲田大学),
人文社会科学修士(ライデン大学)

Visiting Researcher, Advanced Research Institute for Science and Engineering of
Waseda University, M. Eng. (Waseda University), M. Arts (University Leiden)

1-2. 既往研究・研究方法

20世紀後半については、まとまった研究はみられないが、1866年から1952年までのこの場所への主要な提案についてはランドスケープアーキテクトのエベリンクらが『ムゼウムプレイン 1866-1988』⁶⁾に図面を集めている。また、この場所の注目度は高く、デザイン・芸術系雑誌『シミラークルム』⁷⁾はAMP計画特集を組み、美術と文化の専門季刊誌『ヨングホルント』⁸⁾も特集でこの場所の歴史の概観とアンデルソン案をとりあげた。その他の建築や美術系雑誌でもAMPに関する記事を見ることができる。また、この場所に提案された計画案や文献資料収集の他、20世紀後半は新聞報道にも多く取り上げられており、それらの記事も資料として取り扱う⁹⁾。さらに、1988年にAMP競技設計を主催したNRCハンデルスブラッド紙(以下NRC紙)の記者のファン・ローイ(Max van Rooy)や、最終案に繋がる基本概念の作成に関わったエベリンク、1993年に組織されたAMP計画の諮問委員だったフルトセン(Rein Geurtsen)とクロース(Maarten Kloos)、アンデルソンの補佐としてAMPの設計・監理にあたったガル(Stefan Gall)らと面談し、それぞれの活動内容や目的、当時の状況等についての聞き取りを行った¹⁰⁾。

2. 背景：近代的首都への改造から脱柱状化社会へ

2-1. 19世紀後期：場の発生

この場所は、19世紀後期のアムステルダム市拡張の必要性和パリに触発された欧州近代都市たる首都改造の気運が高まった時期に生じた。旧市壁、現在の歴史地区の南端(Fig. 2)に国立博物館(以下RM)、コンサートヘボウ(以下CG)、ステイデルリッ・ムゼウム(以下SMA)¹¹⁾という文化施設が建設され、その間の空間が現在AMPと呼ばれる場所である。上記の文化施設はオランダを代表する文化施設でありながら、個人の寄付や私的集団の先導により設立された点が共通する¹²⁾。19世紀後期には、AMPとなる場所(以下AMP空間)の開発指針が定まっていなかった。この空間は最初から計画されたのではなく、土地が安価だったことと、この地区が新たな文化中心になるだろうという期待と目論見によって、各団体がそれぞれの意図で建設した文化施設によって囲まれ、残った空間といえる¹³⁾。

2-2. 1950年以前のAMP空間の使用状況と提案の継続

市の拡張に伴い、この地区が新たな中心となるだろうという意識ができてきたようで、この地区に対しては1860年頃から市の作成した案の他、競技設計の開催や市民や建築家等の個人による提案が残されている。この場所への提案は、欧州近代首都たるべき文化施設等の建設や都市形式、記念碑性の獲得を目指したことに始まり、次第に近代都市の文化中心地区たる場所とは何か、ということ自体を模索し始める¹⁴⁾。1890年頃からは、AMP空間を建築物以外の広場

や池、庭園といった新たな要素で占めようとする案も出てくる¹⁵⁾。以前に、国立博物館から伸びる大通りを中心とした新市街区を提案していたカibelス(P.J.H. Cuypers)も、1891年に「都市には広場が必要だ」といって広場案を作成した¹⁶⁾。1890年代から1912年頃は、この周辺に高級住宅や学校等が建設されるが、AMP空間には手はつけられず¹⁷⁾、結局どの提案も実現しなかった。ただし、都市計画を決定せず、実行しなかっただけで、この場所は時代を通して積極的に使用され続けた。19世紀後期に代表されるのは、各種博覧会会場で、またその頃からスケートを始めとする各種運動用地、女王の日の祝賀行事の様な国家・国民的行事、子供達の遊び場、移動式遊園地等にも使用された¹⁸⁾。デモ行動の中心地で、第一次世界大戦時には抗議運動¹⁹⁾鎮圧の為に軍警察がキャンプを張り、第二次世界大戦中には燃料備蓄倉庫が建設され病院もあった²⁰⁾。このように、季節的、仮設的、有事の利用が積極的にされた。2つの大戦中は、オランダは中立を保とうとした為に非常に困難な立場におかれ、経済は衰退し、この場所への提案もありみられない。しかし平和が訪れると再燃する。例えば第1次世界大戦後の1925年にはワグナー協会がこの地に新オペラ座の競技設計を行い²¹⁾、第二次世界大戦以降もかなりの数の提案が、新聞や雑誌、同人誌等の様々な媒体に発表されていたという²²⁾。

2-3. 1960年代：脱柱状化、変容するオランダ社会

20世紀前半に非常に伝統的、保守的で遅れた国と呼ばれていたオランダは、1960年代に西ヨーロッパで最も大きな文化的変化を経験したといわれる²³⁾。19世紀末から20世紀半ば頃までのオランダ社会は、多様性を制度化した社会構造を示して「柱状化」と言い表されることが多い。政党が発達し始め、カソリック、プロテスタント、自由、社会主義等の諸政党を中心に独自の社会集団が組織化され、これらが並列して共存したことから「柱」と呼ばれる。各柱は互いの柱を犯さない限り寛容で、また指導者層によって、そのように配慮し合うことで共存してきた²⁴⁾。第2次世界大戦開戦直後、オランダはドイツの占領下となり政党や労働組合は解散させられる。そのことが抵抗活動や新たな社会組織を編成した。地下新聞が定期発行され²⁵⁾、3大労組と雇用者団体は秘密裏に集まり、労使頂上団体の常設機関である労働協会が設立された²⁶⁾。各界の著名人や知識人が中心に拘留されたスイント・ミヒールスヘテルの拘置所では戦後政治構想に関する議論が行われ、党派や宗派を超えた政治改革を志向した。この「改革派」は戦間期までの政治体制を突破し、柱状化社会に風穴を開けることを目論んだ²⁷⁾。戦後すぐは「改革派」による内閣が成立した。しかし、1945年後半には既存政党が復活し、雇用者団体や労働組合もほぼ復活した。1946年の選挙で「改革」を掲げた労働党は第2党に甘んじ、旧社会体制が崩れたわけではなかった²⁸⁾。しかし、60年代になると、経済が上向きになり、世俗化と都市化が急速に進行する。労組運動の他、既存団体に組織されない学生運動、女性運動、反戦運動等が活性化する。「柱」も解体の危機にさらされ、宗教に基盤をおいていた政党もその宗教色を薄めてゆく。カソリックラジオ放送局やフォルクスクラント紙は柱から離脱した²⁹⁾。60年代からは、ソフトドラッグの解禁、同性愛や性風俗への寛容さ、安楽死の合法化等、一見並はずれた自由な社会とも見えることが許容されるようになる。1980年代にAMPとなる場所の議論が一般にまで広がるまでには以上のような社会の変容があった。

Fig. 2 アムステルダムにおけるAMPの位置

Iの扇状の部分が19世紀前期までのアムステルダム市内。MはAMPのあるムゼウム地区。Mの部分は市壁跡地で、そこに文化施設が建てられた。19世紀後半からアムステルダム市は周辺を編入しなから拡大した。点線内が1974年のアムステルダム市域。現在とほぼ同じ範囲。

3. 都市とは何か、誰のものか

3-1. 近代建築運動から都市計画の制度化へ

オランダは近代建築運動や近現代の都市計画における先駆的な存在として知られるが、その傾向の移り変わりも速く、AMSはその影響を直に受けてきた都市でもある。オランダにおける19世紀的な欧州近代都市を目指した首都建設は、18世紀の経済的低迷を克服した1860年代後半からの約30年弱程のことである。これを受け継ぎながらも、入れ替わりにオランダ20世紀近代都市建設活動が始まる。オランダでは、近代建築運動が既存権力への対抗や過去への反動という構図ではなく、むしろ行政と建築家が一体となって進めた。1902年の住宅法の施行は、自治体が都市計画に主体的に関わるような制度化を進めた³⁰⁾。1900年に市に助言を求められたベルラーヘ(H.P. Berlage)はアムステルダム南の拡張計画に携わり³¹⁾、一建築家と市の公共事業局(Publieke Werken)が協働する都市計画が始まった。また、近現代建築運動における理論面でのオランダの果たした役割も大きい。1928年、ラ・サラでの第1回CIAM(Congrès Internationaux d'Architecture Moderne 近代建築国際会議)の唯一の講演は、ベルラーヘによるものだった³²⁾。デ・ステイルやアムステルダム派、オップバウ(Opbouw)デ・アフト(De8)等のオランダ発の建築運動は海外へも影響を及ぼした。ただし国内ではどれも1930年代には解散する。30年代から50年代頃迄はファン・エーステレン(C. van Eesteren)を代表とする機能主義の考え方が力を持っていた。彼は1929年にアムステルダム市の公共事業局都市開発部の初代主任に就任したが(1958年に退職)、これは市に都市計画を担う部署が初めて正式に組織されたことも意味する。彼は、CIAMの都市に関する活動にも積極的にに関わり、1931年から47年にかけて議長に就任した³³⁾。彼が率いる都市開発部は、1934年にアムステルダム総合都市計画(Algemeen Uitbreidingsplan van Amsterdam)を作成した。ベルラーヘは、街区、街路、広場などに注目し建築を延長して都市デザインに組み入れ、都市美を最大の基準として都市の創造を試みた。ファン・エーステレンは、現実の都市を構成する要素(工場、住宅地、交通網、スポーツ施設等)を分析抽出し、それらの集合した構造体として都市を捉え、美以上に、調査や統計に根拠を求めた都市計画を行い³⁴⁾、構成要素の最適な分布と配列によって都市を機能させるという、科学的な都市計画研究と手法を実践し始めた。この流れは、現代オランダの社会経済・社会地理的な調査に基づく国土空間計画に繋がる。彼は、アムステルダムの都市計画に機能主義を全面的に採用し、住宅、職場、レクリエーション、交通の4機能分離の考え方を反映させた³⁵⁾。

3-2. 都市創造の主体としての大衆

しかし、1940年代頃からは20世紀前半の近代建築運動に対する批判や対抗が目立ち始める。ファン・アイク(A. van Eyck)等の活動があるが、やはり彼と親交のあった芸術家、コンスタント(Constant

Nieuwenhuys)によるユートピア都市概念に関する一連の作品「新バビロン」³⁶⁾が1960年代に社会的流行を引き起こした。彼はファン・アイクを通して建築関係者と交流があった。コブラ派の創設者の一人であり、また芸術と政治の統一の実践を目指し、1957から72年にかけてヨーロッパを中心に活動した国際団体シチュアショニスト・インターナショナル(以下SI)の創設者の一人である³⁷⁾。SIの都市への取り組みは地図から始まった。「漂流」や「ずらし」という言葉を多用し、人が場所や移動によって感じ取る都市への感覚や雰囲気感を記述しようと、切り取られた地図の断片を再構成した「心理地理学」(Fig. 3)等を試みた³⁸⁾。コンスタントは前衛芸術や機能主義的設計や建築を「大衆」から活動性や創造性を奪うエリート主義の試みだとして批判し、それが次第に人々の関心を捉えていった³⁹⁾。新バビロン(Fig. 4)には、コンストラクションセクターやノマド・キャンプ等と呼ばれる立体作品や絵画、写真、コラージュ等の平面作品と文章がある。チタン、ナイロン、針金、アクリル等、様々な素材を組みあわせ、移動、交換、解体可能で柔軟な空間性を持つ構築物の連続による都市が考えられた。新バビロンは、あらゆるものから開放されて自律した新しい「ホモ・ルーデンス(遊ぶ人)」⁴⁰⁾の為の、近未来都市として想定された都市である。そこは人間の行動を規定するものは何もなく、柔軟な機能を持った多様な空間が連携した人間主体の全く自由な都市とされる⁴¹⁾。コンスタントは誘われてGEAM(動く建築研究会)に参加したり、機関誌『アーキグラム第5号』の特集「メトロポリス」への寄稿を依頼されるなど建築分野への影響も大きかった⁴²⁾。建築分野では、メガ・ストラクチャーや空中都市へと進む傾向が見られる⁴³⁾。しかし、コンスタントは60年代の終わりに「知識人の間で新たな理想主義が起こることに危機感を覚える」と述べ、この都市が今の社会で実際に建設されることの不可能さを告白し⁴⁴⁾、1974年に最終展覧会を行った。

ところが、コンスタントの影響は建築や芸術分野にとどまらず、一般社会の中でも展開した。1965年のハーグでの新バビロンの展覧会は成功を収め、その作品によって視覚的に印象づけられたその思想は国内外に広く知られるようになった。ある新聞はその年を「コンスタント年」と呼び、また当時台頭していた新左派社会主義者の1967年宣言等にも影響する等、新バビロンは人々の心を捉え、その思想が社会の中に広がった⁴⁵⁾。オランダの政治は60年代に左傾向化するが、新左派社会主義者はその主張の1つに「文化の平等な取り扱い」による生活の質の向上を強調し、急進的な党になろうと模索していた⁴⁶⁾。新バビロンは都市の利用者である大衆が、都市創造に関わる主体であり、権利を持つことを示し、強烈な残像として残したといえるだろう。ケネディーは、コンスタントの個人的な影響力は時と共に衰えたが「遊びに満ちた」自由な文化は1960年代後半のオランダで発展する一方だったと指摘している⁴⁷⁾。

Fig. 3 『パリの心理地理ガイド』表紙
1956年

Fig. 4 コンストラクションセクター 部分 1959年
新バビロンシリーズの例。他に、模型、絵画、写真の平面作品や文章等数多くの作品がある。

1970年代からは、都心再生として19世紀に建設された地区の撤去と再開発が奨励されていた。これは、産業活性化の為に都心に企業向けの土地の確保や自動車道等の都市交通網整備の必要性が考えられていたことに加え、移民や若い世代による古い建築物の不法占拠が横行しており政治的な要請でもあった⁴⁸⁾。同時期にアムステルダムでは市民による都市開発行為の反対運動や改善要求も起こっていた。アムステルダム市役所は都市計画の全権を担っていたが、都市空間設計技術のみが発展し、市民という主体不在の都市計画の実行は烈しい抵抗を生み出していた為、1984年にアムステルダム市は「ブラベラム」と呼ばれる都市開発計画に対する合意形成の為に意思決定プロセスに関する内規を承認し、都市開発計画に際し、より透明性のある計画と合意形成を模索する⁴⁹⁾。伝統的に協議に重きを置く社会であるが、トップダウンから水平協議の時代へ移行する⁵⁰⁾。

4. 第2次世界大戦後の議論と文化中心性の強化

4-1. 機能主義に基づく都市間高速道路構想の実行と批判

第2次世界大戦後、スヴィッター (S. Switzer) が「場所の重要性を再喚起して議論を起こすために」と言って1案を発表した⁵¹⁾。1952年には、この場所の論議を拡大する引き金にもなった、ファン・エーステレン率いる市の都市開発部の案が発表された。1952年の市の提案は、機能主義の考えに基づいたアムステルダムからの都市間高速自動車道構想の一部で、1929年にファン・エーステレン他3名で発表していた提案と基本的な考え方は変わっていない。1929年のファン・エーステレン達の案は、1925年の新オペラ座競技設計で1等になったスタール (J.S. Staal) 案 (Fig. 5) への批判として出されたもので、スタール案を「ムゼウム地区の動きを閉鎖する」とし、彼等の提案 (Fig. 6) が「もはや暫定的なものではなくムゼウム地区の永続的な機能を規定するもの」だと述べた⁵²⁾。彼等の提案は「都市問題の解決的アプローチであり、都市交通を強化する」⁵³⁾と説明され、RMの裏手中心からまっすぐ伸びた自動車道、ムゼウム通りを建設する。道路の両脇には芝生地があり、その上に道路に対して左右対称に大型建築物が予定されている。AMP空間を縁取る植栽が、この場所と周辺の古い街並とを分けている。1952年の市の提案 (Fig. 7) で変更されたのは、RM前の林が残され、大型文化施設の配置が非対称になった点である。激しい抗議行動にもかかわらず⁵⁴⁾、最終的にこの案の文化施設を除き、KLMオランダ航空のバスターミナルを南東隅に加えた案 (Fig. 8) が市議会に承認された。この案の説明文は「RMから伸びる軸線である道路は、まさにオランダの美の殿堂を建てた建

築家の意図したことだ」という言葉で始められていた。それに対し、市の前書記官であったデ・ブッシー (A. le Cosquino de Bussy) は「都市開発部はこの案を正当化する為にRMの設計者を持ち出すのは間違っている、だいたいカペルス案 (Fig. 9) とは一中略一違う物だ」と批判したが⁵⁵⁾、この案は1954年に竣工した。ただし、高速道路構想はこの先進まず、ムゼウム通りは「最短の高速道路」というあだ名で揶揄される⁵⁶⁾。

4-2. わき起こる交通機関建設反対運動や地域改善嘆願

1950年代から70年代は交通網や都市開発計画が盛んに行われた⁵⁷⁾。フルトセンは、70年代には都心再生の動きもあり、AMP空間への提案も、建築物の建設による開発提案が主だったと述べている。70年代末からはこの周辺地域の交通開発の反対や治安向上等の地域改善の嘆願も見られる。モータリゼーションによってAMP空間は駐車場と化していた。1981年にこの地区の治安と環境改善を訴えて署名を求める為に配られたチラシ「CGームゼウム地区の改善」⁵⁸⁾上部には、場所の印象を表す単語として「停滞、不潔、崩壊、ドラッグ、迷惑行為、不安全、破壊、暴力、脅し、泥棒、墮落、恐怖、虚脱感」が羅列されている。1977年には「AMP行きスキポール線反対」⁵⁹⁾の嘆願書が提出された。1983年の「これ以上の交通開発禁止！」⁶⁰⁾という運動は、この地区の商店組合によるもので、主にAMPを周遊するトラムやバス路線の開発に反対する。開発により、自動車300台分の駐車場が失われ、商店街が駐車場と化すことを危惧している。1977年と1978年に、都市計画に関する独立諮問機関 (ARS) がAMPとその周辺の都市開発に関する意見書⁶¹⁾を作成した。1978年の意見書にはAMPの評価点として、文化との関係性があること、行動や遊びには規制がないというこの場所特有の空間体験の可能性を持つこと、都市開発と建築が関係できることの3点を挙げている。過去2、30年の急速な都市開発行為は脅威で、交通関連の建設がAMP空間の価値を破壊したと述べる。続けて、初期の計画や建築の配置に現れている価値を取り戻し、場所の健全を回復する為にAMPと周辺のマスタープランの必要性を訴えている。その際ニューマルクト地区のように⁶²⁾街の顔を守るという方針で計画案を募ること、この場所の印象と機能を「高速道路」から変更すること、車の交通量を規制し、自転車の往来や散歩の権利を取り戻すこと、文化的機能を強め、新たな文化政策やサービスを行う為の第5番目の文化施設用に南西部の土地を確保すること、遊び・文化的表現・社会に対する声明を発表できる場所とすること、地下駐車場の必要性和市に早急な計画検討の開始を求めている。付録には、AMP空間での歴史

Fig. 5 J.S. Staal 1925年
Q. オペラ座、
P. オープンスペース (庭)

Fig. 6 J.M. De Casseres, C. van Eesteren,
Ch. Karsten, B. Merkelbach の連名案 1929年

Fig. 7 都市開発部 (ファン・エース
ステレン) 案 1952年

Fig. 8 1954年に施工された案
K. KLM 航空バスターミナル

的出来事の年表と共に、祭り、スポーツ、戦争時の様子等の写真やスタールの新オペラ座計画案の模型等の写真が掲載されている。

4-3. 強められる文化中心性

19世紀末からのこの場所の地図上の表記は、アイススケート場、スポーツパーク、ムゼウムプレインまたは無記名と様々だったが、1960年代迄にムゼウムプレインに落ち着く傾向が見られる⁶³⁾。この頃からAMP空間の文化的側面をより強化する計画が進行していた。リートフェルト(G.T. Rietveld)の遺作となったファン・ゴッホ美術館(以下VGM)が1974年に開館した。この美術館はオランダが誇る近代美術館であるばかりでなく、オランダの文化宣伝と観光の目玉としての意味も大きい。独自に改装計画を進めていたのはCGで、建物の老朽化と設備の陳腐化、手狭になった事務所や待合ロビー等に対応する為の改修・改装計画の為に組織を1983年に設立した。19世紀末に有志市民の活動で設立したCGは、今回は資金の約3割強が市とオランダ文化財保存記念物局によってもたらされ、約4割が私的団体や個人から、残りは特別行事や宝くじの収益金で集められた。1988年の100周年に合わせて、デ・ブライン(P. de Bruijn)の設計で拡張部分が開館した⁶⁴⁾。拡張部は、東道路側に既存建築物に沿わせるように控えめに付加され、鉄の部分は本体の煉瓦色に合わせて何色か採用され、残りはガラスで覆われる(Fig. 10)。2階には幕間の談話のバーがあり、建物外壁の外側に空中散歩するという建築文化財の新たな楽しみ方も提供する。拡張部は、夜には光の箱となり、AMP方向とも新たな関係性を生む。更に100周年を記念して専属オーケストラは「王立」の冠を得た。

4-4. 新聞紙上の議論の拡がり

1980年代に入るとムゼウム通りを起点にしたハーグへの高速道路開発は断念された。1987年1月に市の都市計画の助役が「構想だけでも国立博物館の地下にトラムを通したい。しかし上物は国で土地は市のものであり、また市民や館長の反対でなかなか難しい」という由を語った⁶⁵⁾。この頃からAMP空間に関する新聞報道が増えてくる⁶⁶⁾。同年7月にパロール紙はAMP空間の20世紀について特集を組み⁶⁷⁾、ファン・ローイはNRC紙の広場に関する連載「プレイン」に記事を書いた。これは紙面の約半分を占める記事で、彼は1925年の新オペラ座競技設計や1983年が博覧会の為にこの場所に競技設計が初めて開催された100年目であることに触れた後、「私としてはこの場所を文化施設やカフェ等のある文化の中心にしたい。色々なものが集まったAMSの代表的な文化中心になれば散策も楽しくなると思う。皆さんはどう思いますか。もう一度競技設計をしましょうか。」という問いかけで締めくくっている⁶⁸⁾。

翌年4月29日のNRC紙の文化面に、彼はAMPへの競技設計の

告知を掲載した。同年8月の競技設計の締切りの延長告知⁶⁹⁾には、AMPが年間通して楽しめる場所になる理想的な計画を募集しており、年末にはSMAで応募作の展覧会が開催されることが告げられている。要求項目には、「最短の高速道路」は無視してよく、最低1500台分の乗用車と20台分のトロールバスの地下駐車場の設置が必須で、加えてSMAの入口を広場側にも設けること、木々をなるべく残すこと、大きな行事の使用に耐えうること等がある。募集部門は2つあり、1つは建築・都市計画の専門家や学生部門、もう1つがそれ以外の部門である。さらに、「賞金より、作品の出来により本格的な競技設計が行われる可能性があること」が重要だと書かれている。審査員には彼に加えて建築家のヨー・クネン(Jo Coenen)、後にAMP計画の諮問委員にもなるフルトセン、国の社会文化計画局長のファン・デル・スタイ(A. van der Staay)、建築・都市計画・芸術の月刊誌『アルヒス(Archis)』編集長のファン・ダイク(H. van Dijk)が名を連ねている。ファン・ローイは、彼がこの企画を始めた時には、確実な開発計画もなかったし、競技設計後に計画が本格化する予定もなく遊びで始めたが、議論が盛り上がり、何か本格的に動き出せばと真剣に競技設計を企画したと語っている⁷⁰⁾。競技設計は盛況で、200点以上の応募があり、180点以上の作品がSMAに展示された⁷¹⁾。この競技設計とその後について、ファン・ローイが企画・製作したドキュメンタリーのテレビ番組によると、建築家から芸術家、各種活動家など実に多様な人々からの提案があったことがわかる。エベリンクもこの競技設計は一種の祭りのようでもあり、オランダ中から作品が集まり、実際の計画提案から芸術作品としてこの場所を風刺するものまで様々だったと述べている⁷²⁾。この競技設計では、3作の優秀作品と14作の入選作が選ばれた⁷³⁾(Fig. 11, 12)。それらの作品は、方法はどうであれAMP空間がなるべく広いオープンスペースとなるものである。フルトセン曰く、ムゼウム通りを「最短の高速道」の記念碑として残すという意見や、AMP空間の中に建築物を建てて開発する案もあったが、この競技設計で彼を含む審査員達が行っ

Fig. 9 カイペルス案 1891年

Fig. 10 コンセルトヘボウの新ウイング
(破線内部) P. de Bruijn 1988年

Fig. 11
1988年の競技
設計の最優秀
3作品と審査

たのは、「空っぽ」であることがこの空間に必要な価値であることを示し、象徴的に都市を分断していたムゼウム通りを解消し、アムステルダムと AMP 空間を再び繋ぐことだった、と述べている⁷⁴⁾。

競技設計後、事態は動き始めた。翌 1989 年 4 月 1 日にハイネケンビールの経営者のハイネケン (A.H. Heineken) が「私はアムステルダムに生まれ、この街を愛してる」からと、1 案をパロール紙に発表した⁷⁵⁾ (Fig. 13)。これは 1 面を占める特集記事だったが、卓越した経営者として有名な彼の提案が新聞に大々的に載ることは、この話題をさらに盛り上げる効果があったのではないだろうか。また、この年の年始には CG、SMA、VGM の館長らが話し合い、SMA の拡張と AMP 計画をヴェバー (C. Weeber) に依頼していた。6 月にヴェバー案を提出された市の都市計画の助役は、「まず予算を検討しないと何ともいえない。夏以降に都市計画部と諮問機関と一緒に検討できるだろう」と答えている⁷⁶⁾。ヴェバー案 (Fig. 14) では SMA 新館が CG 前のファン・バールレ通りに沿っていっぱい拡張され、AMP は RM と SMA 拡張部の間に建築に囲まれた、閉じた広場として設けられる。広場には VGM の拡張計画の新棟の建設も予定され、RM と SMA 拡張部の中心軸の交差点には記念碑を設置する⁷⁷⁾。CG と AMP を繋ぐ若干の緑地はあるが、両者は視覚的に切り離されている。巨大な SMA 拡張部を含むヴェバー案への批判や反対意見もあり、それらもまた新聞に掲載された⁷⁸⁾。SMA、VGM は熱心に拡張を望んでいたが、同年 10 月の市の美術に関する助役の意見は、美術館の拡張の可能性はあるが、19 世紀美術の美術館の拡張計画として、ヴェバー案は十分でないと芳しくないものであった⁷⁹⁾。その後、1990 年に発足した南区⁸⁰⁾は、最終案に繋がる「南の庭」(Tuin van Zuid)を発表したが、パロール紙は 1991 年にも続けて様々な趣向を持った提案図を掲載した記事を度々組んでいる。

5. 新ミレニアムに向けてまとめられる計画

5-1. 自治体と識者による基本計画

新たに発足した南区が AMP を管轄内に持つことになり、この場所の完成にむけて動きだした。1994 年発行の『コミュニケーションするプラン AMP の改修』と題された、AMP 計画の経緯、概念、予定、予算をまとめた文書によると、1990 年 6 月にエベリンクと南区の都市計画部は基本概念作成の為に調査・研究を始め、年末に「南の庭」(Fig. 15)と題する案を発表した⁸¹⁾。エベリンクは、オランダ人以外の設計者に委ねる為に、基本概念を作成する由を説明されていたと述べている。南の庭案では、AMP の南側に建設物等はなく、広く開放された空間が中央に取られる。南東角の木々で守られた空間にナチスの女性収容所、ラーフェンスブリュックの追悼碑を設置する。

Fig. 12 「世界で最も短く、乱暴な自動車道への薔れ高き暗示」 J. Körmeling, J. van IJzen 1988 年。旧ムゼウム通りを批判的に扱った作品。入選作で、ユトレヒト市立博物館が買い取った。

Fig. 13 A.H. Heineken 案 1989 年 AMP から撤去する彫刻や構築物、地下駐車場と地下鉄の出入口、新たに建設する住宅群、動く歩道、噴水広場、記念碑等を示した。中央には SMA 新館のガラス建築を計画している。

Fig. 14 C. Weeber 案 1989 年 d'.SM 拡張部分

Fig. 15 「南の庭」アムステルダム南自治体 1990 年 d'.SM 拡張部分、f. 花畑

SMA と VGM は拡張が予定され、本館と新棟の間や、AMP の間にはテラスや花畑が設けられ、その間を遊歩道が走る。1992 年に市長と市議会はその基本概念を承認した。南区は、都市計画家のフルトセン、ARCAM 代表のクロース、ランドスケープアーキテクトのホスパー (Alle Hosper) らに諮問委員になるように依頼し⁸²⁾、各文化機関の拡張計画を新しい AMP に関係させる為に、SMA と VGM を迎えた委員会を発足させた。上記 3 名が諮問委員として選ばれたのは、どんな機関にも所属しない、独立した専門家ということが重要だったという。またフルトセンは、当時彼が都市計画家として活動しながら、19 世紀的都市の価値に敬意を払うべきだという内容の講演を方々で行っていたことも依頼された理由だろうと述べている⁸³⁾。

5-2. 最終案へ

諮問委員会はアンデルソンを AMP の設計者として指名した。彼等はオランダ人にとって AMP 空間は思い入れの強い場所であるうえに、AMP の議論があまりにも大きくなり、あらゆる人々が関わり過ぎ、各人が AMP にたいして確固とした考えを持ちすぎていると考えていた。その為、全く新しく、この議論に無関係だった人物に AMP の設計を依頼することにした。また、当時の建築家や都市開発者達の中には、建物による建設開発を主張する意見も多く、彼等は建物にとらわれすぎると考えた為、ランドスケープからアプローチして AMP と都市との関係を生み出せる人物を求めた。つまり、建築家やアーバンデザイナーではなく、外国人のランドスケープアーキテクトに設計を依頼することで合意した。候補者の中からアンデルソンが選ばれたのは、ウィーンのカールスプラツを高く評価したことと、パリのラ・デファンス等の首都の都市広場の計画にかかわった経験があったという。特にホスパーは「静寂」の質もこの場所に必要だと考え、また北欧のランドスケープデザインの伝統を受け継ぐ者としてアンデルソンを推した。南区は AMP を実現させようという強い意志を持っており、委員会は困難な計画を幾つかやり遂げていたガールにアンデルソンの補佐を依頼した⁸⁴⁾。VGM は新棟の設計者に黒川紀章を指名した。SMA の拡張にかんしては 1992 年に指名競技設計を行いヴェンチュリー (R. Venturi) を 1 等とした。1993 年にはアンデルソンによって初回のマスタープランが発表された。

5-3. アンデルソン案の評価

アンデルソンのマスタープラン発表と公開説明会にともない周辺関係施設や関係団体、個人からの賛否両論の意見が寄せられた⁸⁵⁾。同年にアムステルダム市の都市計画に対する独立諮問機関 (ARS) もアンデルソン案に対して意見書を出している⁸⁶⁾。10の意見があり、多少解決すべき問題を示しているがおおむね賛成意見である。第1番目は、ARSはこの計画に満足している。落ち着いてしかも寂しい場所でない。また地域全体の景観を整えている。広い空地があり、大きな行事の使用に耐える。この案は良い中立性を持っている。池と木々の列が空間の調和を醸し出し、AMPとCG周辺空間との関係を創りだしたことにに対して満足している、と述べている。第2番目に解決できていない難解な問題として「夕方には暗く無人となり安全でない。大勢の人がこの場所に来る動機があるべきだが、多くの機能(店舗や飲食店等)を加えると場所の中立性が失われる。」とある。第6番目には、今後の美術館の改装はこのマスタープランを考慮するべきで、アンデルソン案がこの空間を規定する最も重要な指針とされることを求めている。ARSはAMPが周辺の多種の要素を調整しながら調和させる機能を獲得したことと場の汎用性が保たれたこと、また空間の中立性に高い価値を置き、それらを高く評価した。

5-4. ムゼウムブレインへ

アンデルソン案 (Fig. 1, Fig. 16) は⁸⁷⁾、南の庭案の基本的な考え方を踏襲している。まず中心になるべく広くとぎれることのない空間を再獲得させた。AMP側と各文化施設の間に関係をつくり、さらに文化施設同士も関係を持つように美術館の拡張範囲を設定し、遊歩道を配す。また、AMPと周辺市街地を分割していた木立の縁取りの一部を撤去し、AMPを周辺都市とより直接的に繋げた。RMの手前の扇状の「美術館の小さな森」も以前の記憶を残すように木立を間引いた。おかげで、RM中央を貫通するトンネル状の歩道と自転車道を旧市街地側から抜けると、南へと広がるアムステルダムを、より広々と体感することができる。美術館の小さな森中央の池は夏はプール、冬はスケート場となり、その他バスケットコートやスケートボード場等もある。小売や喫茶のパビリオンもここに設けられる。AMPの北側に集中して活動的な要素を配置し、南側を広い開放空間とする。賑わいを持ち込むと同時に、既存の季節的、仮設的で不特定な使用の可能性を最大限に残した。AMP空間の最大の変化は、CG東側のデ・レッセ通りの北端、つまりAMPの南端からRMの西脇に向かう光のラインによってもたらされた。光のラインは遊歩道であり、夜は埋込み照明が地上に光の線を描き、地下駐車場に光を与える。旧ムゼウム通りはこの位置からRMの中心に向かっていったが、光のラインは何の目標物もない北西の空間へと向かう。この3本目の大きな軸性は、AMP上に絶対的で、記念碑的な軸性の可能性を打ち消す為に設けられたという。RMからの軸線はそれをなぞる形で池を設置することで止め、また建築物や道路などのAMPを取り囲む都市的な要素からの軸線も延長してAMP内に導入すると共に、その強さを平均化する⁸⁸⁾。さらに、他の文化施設を通してRMとCGを結ぶ未広がりな遊歩道と、SMAとVGMの間には人溜まりのできる空間を設け、そこから東へ拡散する3本の小道を設定した。遊歩道のストライプの床パターンは、南側道路の人波や交通の不規則なリズムをAMPに引き込む為に設けたという。また、王立オランダ自動車協会、アメリカ領事館、学校等の重要な施設も立ち並ぶ東側では、木立や

花畑によって周辺の都市要素が段階的な干渉を経てAMPと関係する構造を作り、文化施設のある西側は、抽象的な形の抽象的な配置によって「何でもなく、何にでもなれる」空間としたという。この抽象的な、というのは、VGMの新館と、SMAの隣にある、あたかも本のページの角が折られてめくれ上がったように地面を持ちあげた、ドンキーイヤーとも呼ばれる3角形の芝生斜面の形と配置のことである⁸⁹⁾。ドンキーイヤーは、地面を連続的に空へと上昇させることで、AMPにさらなる空間の広がりを与えるために設けられたという。この場所は、人々が日光浴をしたり、子供たちが駆け登ったりと利用頻度は高い。南東のトラム線路との緩衝地帯の花畑の側には、ラーフェンスブリュックの追悼碑の彫刻が改修されて再設置された。

アンデルソン案への批判や抵抗、計画推進の困難はもちろんあった。ガルによると、特に東西を結ぶ小道に関しては、アンデルソンはデンマークのやり方として、予算の一部を取り置き、竣工後に人の動きを見てから設置したいと主張したが、オランダではそのような予算の配分は無理だった。そのため、アンデルソンは予測的に3本の小道を設置しなくてはならなかった。他の文化施設の拡張計画との折衝の困難もあった。VGMの新棟を担当していた黒川紀章は、最初はAMPのより中央近くに、大きな円筒形の建築物を建てる案を出していたが、アンデルソンは黒川案の規模を縮小し、建物の位置を本館側に寄せ、形を楕円形にするように説得することに成功した。SMAに関しては、最初の設計者ヴェンチャーリとは、ファン・パールレ通り側に入り口を設け、そのアトリウムの空間性をVGM側まで伸ばして2つの美術館の間に関係性を作り、さらにドンキーイヤーとの間にも何らかの関係を作ることで、街路側、文化施設間、AMP側のどの方向も人通りのある生きた空間とすることを確認し合っていたという⁹⁰⁾。最初ヴェンチャーリは、ドンキーイヤーとの間の空間を裏庭と呼んだが、「何でもなく、何にでもなれる」場所にするということにも合意していた。しかし、ヴェンチャーリの計画が中止になり、当時のSMA館長フクス (R. Fuchs) は、今度はシザ (A. Siza) を設計者として指名した⁹¹⁾。フクスはアンデルソンのAMP計画に対してはあまり肯定的でなく、またSMAにとって有利な案でないと考えていたためか⁹²⁾、シザ案はAMPの基本概念を考慮しない設計だっ

た。シザはアンデルソンの薦めと南区の承認によって、地下駐車場の入口の意匠設計も任されており、アンデルソンは最終的にドンキーイヤーの下に地下駐車場とスーパーマーケットの入口を設けることを妥協していた。しかし、その直後にシザはドンキーイヤー自体の撤廃を要求した⁹³⁾。アンデルソンはドンキーイヤーをAMPにとって重要な要素と考えていたが、シザはかなり強固に自分の意見を通そうとした。ただ、ガルとアンデルソンはシザの駐車場の入口案が、初期予算をかなり上回るうえ、シザのSMA拡張計画も実現するかは考えにくい案だと思っていたという。その為、今後どのような建築家がSMAの増築を担当することになっても、マスタープランに配慮して設計を行うことを気づかせる暗示として、この位置にドンキーイヤーを設置する必要性を再認識したという⁹⁴⁾。

開園日、1999年8月22日のプレイベントは、正午のピクニックに始まりスポーツ、野外レストラン、出し物や工作教室などが行われた。夕方から正式な開園行事が行われ、宴は夜まで続いた⁹⁵⁾。AMPは平常時は、近隣住民や観光客の昼食、日光浴、散歩、通り道に使われ、観光の中心地でもある。また、AMPは10万人以上が集まることもある有数のデモ会場であり、女王の日やホラントフェスティバル、フットボールのヨーロッパチャンピオンや地元クラブチームの優勝時の集会等の国家、国民、国際的行事に使用される。

AMPは、各文化施設背後の都市計画が定まらない裏側の存在から脱却し、中心性も獲得した。この中心性は強い求心性を持つものでなく、ここに繋がる建築、道路、人の流れといった都市の要素を引き込み、AMP上で緩く交差させながら、再び市内へと解放する環境を設定しようとしている。強力な軸性や特定の文化施設を景観上の頂点とすることや中心性を作り出す焦点となる場所の設置、形式を高める為の空間の対称性や幾何学的な完成形は避けられている。また、アンデルソンはAMPを公園であり広場であり、考え1つでどんなものにもなれる開かれた空間と言ったが、場の汎用性を保ちながら、賑わいと静寂の両面が求められた⁹⁶⁾。

6. まとめ

AMP空間は20世紀後期にはVGMやCGオーケストラの「王立の冠」の獲得など、国家・文化的な性格を強めながらも、20世紀前半に成長した国民的性格も保った。様々な提案と試行錯誤の歴史の後に都市の多様な要素を受け入れる素地をつくり、AMPとして正式に開かれたことで、首都における文化中心地としてより確実な存在となった。また、19世紀末に必要な訴えられた都市広場としての価値も獲得し、文化施設の裏側の存在を脱却し、中心性を確保しながらも、支配的な軸性を否定し、形式を打ち消すような操作が行われた。この点でAMPは階層をこえた文化横断的な日常的な祝祭空間である。

20世紀末のAMPのランドスケープデザインは、20世紀後半の芸術や社会の動きを反映している。SIは前衛芸術を「大衆から活動性や創造性を奪うもの」として批判した。全てのものから解放された人間主体の理想都市を構想したコンスタントの「新バビロン」は、60年代に社会的流行となり、当時台頭していた新左派社会主義者にも影響を与えた。その主張の1つは「文化の平等な取り扱い」による生活の質の向上であった。60年代の社会変革を通して、この場所の議論が再燃した20世紀後半には、エリート・ブルジョア層の19世紀的市民に加え、大衆も都市計画や都市の文化を象徴する空間の

デザイン決定に関与しはじめ、無視できない存在になった。70年代には、AMPへの都市開発反対運動や地域の健全化を求める運動が起き、ARSは「自転車の往来と散歩の復権」と文化施設の追加や自由に文化的な表現や発言が行えるという「文化的機能」の強化を求めた。80年代には、都市計画の発展はエリートに支えられながらも、その計画と合意形成の過程に透明性を追求した水平協議の時代に移行する。また「柱」を離れた新聞が80年代に、都市の文化中心地としてAMP改装の議論の口火を切り、盛り上げたことも象徴的だ。ファン・ローイが真剣な遊びとして始めた1988年の競技設計は、この場所の重要性和人気を再確認する出来事だった。また、この審査員達は「空っぽ」であり開放されていることがAMPに必要な価値で、象徴的に都市を分断していたムゼウム通りを解消し、アムステルダムとAMP空間を再び繋ぐべきだと示した。1990年の南区の発足は、AMPの実現を強力に後押しする転機となった。また、NRC紙の競技設計とその後の新聞紙等で繰り広げられた報道や批判、提案も、最終案の基本計画をまとめる為の取捨選択要素を抽出し、この空間の価値や意味の確認と、それをAMPのランドスケープデザインに反映させる為の重要な過程だったと考えられる。エベリンクと南区は研究の上に基本案を作成し、独立した個人の専門家にAMP計画の諮問委員を依頼したが、委員の一人は、1888年の競技設計の審査員でもあったフルトセンである。諮問委員会は、今までのAMP議論に無関係な全く新しい人物で、なおかつ建築に囚われすぎずにランドスケープの視点から都市空間に関わるものとして、外国人のランドスケープアーキテクトをAMPの設計者に指名した。アンデルソンはなるべく広いオープンスペースの獲得とAMPの空間的拡がり重視した。ARSはアンデルソン案が周辺の多様な要素を調整しながら調和させたこと、場の汎用性が保たれたこと、また空間の中立性に高い価値を置いたことも評価した。この場所に繋がる周辺都市からの要素はAMP空間に導入されるが、方向付けられることはなく、再びアムステルダム市内へと返される。また、日常・非日常、組織・非組織の種類を限定しない活動がAMPで行われることで、活動内容の固定化をさけ、自由な表現の可能性と機会を生み出すための仲介役としての役割をAMPのランドスケープデザインが担われている。

本稿では20世紀後期のAMP空間の議論の動向に注目した。今後、AMPに提案された計画案の構成要素や計画動向の時系列的な変化を建築や芸術社会運動と共に比較分析するとともに、近現代の建築運動や都市化、造園分野の相互関係の中で、60年代を経てオランダの近現代の都市のランドスケープデザインがどのように発展してきたかの研究にも発展させたい。

謝辞 インタビューを行った、M. van Rooy、R. Geurtsen、M. Kloos、S. Gall、H. Ebberinkの各氏には資料収集や情報提供等のご協力、ご教示を頂いた。J.C. Kennedy アムステルダム自由大学教授にはオランダで出版された氏の博士論文を頂戴した。また、留学中の奨学金を頂いた国際ロータリー財団やLeiderdorpロータリークラブのB.J. Lietaert Peerbolte氏、NelとJan Slagter夫妻、ライデン大学での指導教官A.J.J. Mekking教授、日本語学科の国森正文先生と夫人の由美子様にはオランダ語やオランダに関する知識等、様々なことに協力頂いた。この研究の一部は財団法人日本科学協会、笹川科学研究助成を受けて行っている。末筆ながらここに深い謝意を表します。

注 *本文にて既出でない人名、地名については原語表記とする。

- 1) 前回の拙者の論文、田村望、「アムステルダム、ミュージアム・ブレインに見るオランダ19世紀後期ヨーロッパ近代首都としてのランドスケープ形成に関する考察」、日本建築学会計画系論文集 第607号、2006年9月、pp.215-223. から幾つかのカタカナ表記を改めた。ミュージアム・ブレイン→ムゼウムブレイン(AMP)、コンセルト・ヘボウ→コンセルトヘボウ(CG)、ステデリック・ミュージアム→ステデリック・ムゼウム(SMA)。
- 2) Amsterdam city, *Choosing Amsterdam, Brand, concept and organization of the city market-*

- ing, 2003 に 'the potential contact point' の上位としてあげられている。
- 3) 建築史分野と比べ後発であるが、アムステルダム自由大学、ライデン大学、デルフト工科大学等でも近現代ランドスケープデザイン史の研究が進められてきている。AMP はこのような書籍の中で紹介される一例でもある。オランダの庭とランドスケープデザインの図面や写真入解説辞典、C.S.OLDENBURGER-EBBERS, A.M. Backer & E. Block, *Gids Voor de Nederlands Tuin- en Landschapsarchitectuur*, De Hef Publishers Rotterdam, 1998 や 20 世紀オランダの庭とランドスケープデザインを写真等と共に紹介、解説した、G. Deunk, *20th Century Garden and Landscape Architecture in the Netherlands*, NAI Publishers, 2002 等が出版されている。
 - 4) 田村望、*op.cit.*, pp. 215-223.
 - 5) 本論文で「大衆」とは、19 世紀後期から徐々に指導者層、裕福層といわれる既存市民の中で参政権を持ったものに加え、参政権を持たなかった裕福層、労働者階級、女性等にも参政権が認められ、これらの人々を含んで拡大した市民を「大衆」と呼ぶ。また、19 世紀における市民で参政権があったのは一定納税額以上を収めるものであった。19 世紀後期から市民層が拡大はじめ、20 世紀に入ると労働者階級も市民と認められるようになる。19 世紀末から 20 世紀にかけてのオランダ社会は「柱状化」という言葉で表現されることが多い。様々な政党が成立し始め、社会はそれぞれの「柱」を指導するエリート達の政治によって互いの柱を侵さないように平和的に共存してきたといわれる。また労働者階級も政治に影響力を及ぼす、指導・組織された「大衆」として重要になる。例えば、オランダの約 35% を占めていた労働者はカソリックで、彼等の支持を得ることでキリスト教系の政党は勢力を伸ばした。新たな市民である彼らを含む「大衆」が、社会・政治・文化において無視できない存在となり、そのような動きの中で様々な近代的大衆政党が成立する。オランダの 25 歳以上の男性全員に普通参政権が認められたのは 1917 年、女性は 1919 年。選挙権の行使が義務制から任意制に移行したのは 1970 年で、義務制の時代の投票率は 90% 程度だった。選挙権年齢は 1972 年に 18 歳に引き下がり現在に至る。1960 年代からは柱状化社会が急速に崩壊をはじめ、組織も個人も「柱」を離れた存在となってくる。「大衆」も、自律した自由な思考と意思を持つ個人の集合である「大衆」へと変化する。柱状化社会やその崩壊については本論文第 2 章でふれる。注 26) 参照。また注 27),28) に掲載した文献も参照。オランダの選挙制度の概要は、監修 内貴滋、執筆 田代 ひとみ、桐野 義之、『オランダの地方自治』、財団法人日本自治体国際化協会、2005 を参照した。
 - 6) Hans Ebberink & Birgitte de Maar, *Museumplein 1866-1988 De museumterreinen te Amsterdam. Een inventarisatie van de plannen*, Dienst Ruimtelijke Grëning Amsterdam & Econ. Ontw, 1988. これは、第 4 章で取り扱う 1988 年の AMP の競技設計の展覧会時に AMP の歴史部門の展示として計画していたものだが、応募作品の展示が多数となり、展示スペースが不足したため、この部門の展示を中止し、代わりにこの冊子を出版したものである。
 - 7) Ada Gravina, 'Van Museumterrein tot Museumplein', *SIMULACRUM* Nr.3, 1998, pp.8-12.
 - 8) Lydia Lansink, 'Het Museumplein Amsterdam. Een historisch overzicht', *jongHolland* nummer 2, 1999, pp. 6-29.
 - 9) SMA や ARCAM 資料室では AMP に関する新聞や雑誌の記事を年毎に収集している。AMP を取り上げる回数が多いのは全国紙のフォルクスクラント紙、トラウ紙、NRC 紙と 1977 年に全国紙からアムステルダム地方紙となったパロール紙である。特にパロール紙は詳細かつ掲載回数が多い。4 紙ともに報道記事の他、場所の歴史、歴代の提案、新たな提案、批判等の特集記事を幾度と組んでいる。また、文化面における書き方は、読者に疑問を投げかけ、挑発的な表現をするものもある。その他の新聞で記事が見られるもので、代表的なものは、アルヘネン・ダグブラット、テレグラフ、アムステルダム・スタッドブラント、エコー等がある。
 - 10) ファン・ローイは元 NRC 紙の建築や都市計画、文化を主に執筆する記者であり、その他の新聞への寄稿や多くの現代建築に関する著書もある記者。様々な大学で講演を行い、建築設計競技の審査員なども勤める。ベルラーへは祖父。エベリングはアムステルダム在住のランドスケープアーキテクトで、注 6) の冊子の作成者でもある。フルトセンは国内外の都市計画を行うと共に、デルフト工科大学で教授を務めた経歴もある。クロースは建築教育を受け、非営利財団 ARCAM を創立した。ガルはロッテルダムにある Atelier Quadrat に所属する都市計画家。この論文に関する聞き取り調査は 2006 年に行った。エベリング：3 月 6 日、クロース：9 月 26 日、ファン・ローイ：9 月 27 日、フルトセン：9 月 29 日、ガル：10 月 6 日。
 - 11) CG はオランダで最も権威ある、国際的評価も高い音楽ホール。SMA は直訳すると市立美術館だが、それ以上の存在で、その設立と運営は民間団体や個人の多大な援助なくてはありえず、1945-63 年に館長だった Willem Sandberg によって、現代の現代美術の展示・運営概念を確立した先駆的な美術館として国際的に知られる。
 - 12) Michiel Wagenaar, 'Between Civic Pride and Mass Society', *Amsterdam Human Capital*, ed. by Sako Musterd, Willem Salet, Amsterdam university press, 2003, p. 59.
 - 13) 19 世紀後期の AMP 空間の起源とこの場所への提案については前回の拙者の論文で論じた。田村望、*op.cit.*, pp. 217-220.
 - 14) 田村望、*op.cit.*, pp. 216-219.
 - 15) *Ibid.*, pp. 217-220.
 - 16) Hans Ebberink, Birgitte de Maar, *op.cit.*, p. 36.
 - 17) Lydia Lansink, *op.cit.*, pp. 14-15. また、この周辺の建設が進むのは AMP の側に建っていた蠟燭工場が、1891 年に 1901 年の移転を決めたことも理由の 1 つと考えられる。
 - 18) アムステルダム市アーカイブは 1885 年頃からの AMP 空間でのスケートや運動会、出来事、祝祭時の写真を所蔵している。
 - 19) 1917 年に労働者達が国内の食糧難に抗議してジャガイモ騒動が起こった。
 - 20) Holman Theodor, Photography Siebe Swart, 'Museumplein', *Museumplein*, Nai Uitgevers, 2000, pp. 5-6. 及び、アムステルダム市アーカイブ所蔵の写真資料による。
 - 21) Hans Ebberink, *op.cit.*, p. 48.
 - 22) ファン・ローイ、フルトセン、クロースによると、1950 年代から 1988 年の競技設計までにもかなりの数の提案が、建築や美術系の雑誌、新聞、同人誌などに発表されていたという。
 - 23) 50 年代末まで外国人は総じて、オランダを前時代の伝統と慣習に浸った、古風で「時代遅れ」の社会だと見なしていた。アメリカ人社会学者のロナルド・イングルハートは 60 年代初頭のライデンにいた頃を振り返って、オランダが合衆国にくらべて「非常に伝統的」だったと述べた。ハインリッヒ・ハイネが口にしたとされる格言（時にボルテールの作と見なされることもある）に「世界の終末がやってきたら、私はオランダに行くことにしよう。あそこは何でも 50 年遅れたから」という台詞があって、当時ひょうきん者が好んで引用した。仮に「近代的」社会が、工業化社会や世俗化社会（公的な場における宗教の影響が小さい社会）を意味するのだとすれば、こうしたオランダ観は当を得たものであったといえよう。オランダ経済は、ドイツやベルギーといった周辺地域に比べて工業化が遅れた。歴史家たちが 1890 年代に経済的「離陸」を見いだしたといっても、工業生産の増加は、1945 年以後まで見られない。50 年代までオランダは比較的貧しい国であった。ストライキはまれで、外で働く女性ほとんどおらず、60 年代半ばまで賃金は比較的低かった。大規模かつ強力なカリックやプロテスタントの下位文化に支えられて、教会の出席者数や出生率はいずれも高く、オランダは統計学上、北ヨーロッパで特異な存在となっていた。J.C. Kennedy, *Building New BABYLON: Cultural Change in the Netherlands During the 1960s*, 1995 年アイオワ大学博士論文 p.4-5. 第 1 章和訳、大西吉之。（この論文はオランダで J.C. Kennedy, *Nieuw Babylon in Aanbouw: Nederlandin de Jaren Zestig*, Boom Publishing, 1995. として出版されている。）
 - 24) 社会の「柱状化」に関しては、歴史、政治、社会学を中心に様々な書籍で論じられている。概略を述べると、19 世紀後期から様々な政党が成立しはじめ、それらはある信念に基づいたグループ（柱）を形成する。各柱は、新聞社、放送局、学校、労働組合、病院、スポーツクラブ等の組織を内包し、ある柱に生まれた人は死ぬまで柱による組織された社会で生活することができた。栗原福也、『世界現代史 21 ベネルクス現代史』、山川出版社、1982. p. 18 では「『巨大な自由主義勢力（主流）から身を守るため、それぞれの下位文化を維持しようとした。その結果、自由主義が望んだような統一的「国民」文化の代わりに、互いに性格の異なる複数の下位文化が生まれた。一中略一これらの「柱」は自前の組織を過剰なまでに抱えこむようになっている。キリスト教的社会思想によって鼓舞され、各団体の相対的な自主性を認めるひとつのシステムがあり、すべてがそこに統合されていたのである。』と説明する。また注 5)、注 27),28) の文献も参照。
 - 25) ed. J.C.H. Blom & E. Lamberts, *History of Low Countries*, Berghahn Books, 1999, p. 438.
 - 26) 水島治郎、『戦後オランダの政治構造 ネオコーポラティズムと所得政策』、東京大学出版会、p. 81.
 - 27) *Ibid.*, p. 84.
 - 28) *Ibid.*, pp. 87-92.
 - 29) *Ibid.*, pp. 242-243. フォルクスクラント、トラウ、NRC、パロール等の各紙は元々「柱」に属した新聞だったが現在では各柱を離れている。
 - 30) 自治体への土地買上げ権と収用権を付与し、低賃貸住宅を投機市場から一掃する為に自治体や非営利の住宅協同組合を対象にした長期低利融資を可能にし、人口 1 万人以上もしくは過去 5 年に 20% 以上の人口増加を見た自治体は都市拡張計画の策定と 10 年ごとの見直しを義務づけられた。ドナルド I. グリンバーク著 矢代真己訳『オランダの都市と集住』、住まいの図書館出版局、1999、pp. 64-70.
 - 31) 山口廣、『アムステルダム建築史』、SD 第 185 号、鹿島出版会、1980 年 5 月、p. 27.
 - 32) Eric Munford, *The CIAM Discourse on Urbanism 1928-1960*, MIT Press, 2000, p. 18.
 - 33) *Ibid.*, p. 276.
 - 34) ed. Allard Jolles, Erik Klusman & Ben Teunissen, *Planning Amsterdam: Scenarios for Urban Development 1928-2003*, Nai Uitgevers Pub, 2004, pp. 52-53.
 - 35) 角橋徹也、塩崎賢明、「20 世紀アムステルダムの計画綱領と政調管理に関する研究」、日本建築学会計画系論文集 第 555 号、2002 年 5 月、pp. 233-235.
 - 36) コンスタントは姓でなく、名で呼ばれることを好み、一般に名で表記されるため、本論文でも扱う。「新バビロン」は 1940-50 年代に構想され製作された。写真作品は全体を俯瞰するものは少なく、内部に入り込み多様で異質なものが関係する空間の連続を強調する。コンスタントの新バビロンや SI の都市に関しては、Simon Sadler, *The Situationist City*, The MIT Press, 2000 や Mark Wigley, *Constant's New Babylon- The Hyper Architecture Desire*, 010 Publishers, 1998. に詳しい。
 - 37) Mark Wigley, *op.cit.*, p. 12.
 - 38) Simon Sadler, *op.cit.*, p. 182.
 - 39) J.C. Kennedy, *op.cit.*, p. 1.
 - 40) 『ホモ・ルーデンス』は J. Huizinga の「遊び」の理論化に関する著作で、1938 年に出版された。J.C. Kennedy, *op.cit.*, p. 2 の注 3) 等から考えると、コンスタントのいう「ホモ・ルーデンス」とは 1950 年代にフランスで文化進化論的に発展した遊び理論に触発されたものである。南後由和、「コンスタントのニューバビロンと 1960 年代の建築界との相互関係」日本建築学会大会講演梗概集（北海道）、2004 年 8 月、p. 591 は、コンスタントの思想背景には Guy Debord の批判的社会理論や Henri Lefebvre の『日常生活批判』、『都市への権利』影響がある、と指摘している。
 - 41) 新バビロンには「宗教も、道徳も、法も、芸術も、家族もなく、また都市も、住まいも、通日も、運動場もない(*1)」のである。コンスタントの意図するところによれば、新バビロンとは「完全なる全体芸術であり、人類のあらゆる活動を統合したもの(*2)」であった。『(*1)』は J.L. Locher, *New Babylon*, Gemeentemuseum den Haag, 1974, p. 12. 『(*2)』は Constant, *Randstad 2*, 1962, p. 134. の引用。J.C. Kennedy, *op.cit.*, pp. 2-3 で英訳されたものを使用。
 - 42) Simon Sadler, *op.cit.*, p. 133.
 - 43) *Ibid.*, pp. 152-155.
 - 44) *Ibid.*, p. 155. 「新バビロンは新たな経済観念における社会を前提にしており、今すぐの現実とは不可能だと気がついている。」と述べている。
 - 45) J.C. Kennedy, *op.cit.*, p. 3
 - 46) *Ibid.*, p. 383.
 - 47) *Ibid.*, p. 3.
 - 48) Hans van Dijk, *Twentieth Century Architecture in The Netherlands*, 1990, 010 publisher, 1990, p. 163
 - 49) 笠真希、「オランダにおける都市開発のプロジェクトのプロセスデザイン」、日本建築学会計画系論文集 第 581 号、2004 年 7 月、pp. 99-97.
 - 50) 笠真希、「オランダの協議型都市計画における戦略としての都市デザインについて」、日本建築学会計画系論文集 第 599 号、2006 年 1 月、pp. 110.
 - 51) Hans Ebberink, *op.cit.*, p. 48.
 - 52) *Ibid.*, p. 50.
 - 53) *Ibid.*, p. 52.
 - 54) Holman Theodor, *op.cit.*, pp. 13-14.
 - 55) *Ibid.*

- 56) 「最短の高速道路」の他、Arend Evenhuis, Plein gezocht en niet gevonden, *Trouw*, 3-11-1988、に AMP に来る目的として「夢破れた大通り (Boulevard of Broken Dreams)」の上映を近隣に見いだしに来る」とある。同名のロードムービーが AMP で上映されており、その名をもっているこの地区の事を言い表している。
- 57) ed. Allard Jolles, Erik Klusman & Ben Teunissen, *op.cit.*, pp. 124-125. 1968 年には D.A.Jokinen (アメリカ) による「都市にチャンスを」というアムステルダムの都市交通問題解決案が出され、高架の高速道路と地下鉄、またその周辺に多くの大建築物が建てられる。また、地下鉄や交通開発の是非の議論が激しく行われていたと述べられている。
- 58) Werkgroep "Behoud Concertgebouw- Museumbuurt", Werkgroep Behoud Concertgebouw - Museumbuurt, 1981. アムステルダム市アーカイブ所蔵。
- 59) 地区委員長の Mvan Dijk-Lely 氏と運動推進部長の J.F.H. van Rappard 氏の署名で、「Geen Schipolelijn naar het Museumplein!」という、スキポール空港行き鉄道線計画廃止嘆願書が出ている。アムステルダム市アーカイブ所蔵。
- 60) Het sekretariaat Winkeliersvereniging Museumkwartier, BAN HET NERKEERSPLAN MUSEUMK WARTIER!, 1983. アムステルダム市アーカイブ所蔵。
- 61) Advies van de Amsterdamse Raad voor de Stedebouw (ARS), *Aan het Gemeentebestuur over stedebouwkundige maatregelen betreffende het Museumplein*, 1978, より抜粋。アムステルダム市アーカイブ所蔵。ARS は都市計画に関する独立した諮問機関で、都市開発や計画案に対して意見や助言を行い、意見書を作成し公開する。委員は経済、商業、文化、交通、都市、建築など様々な有力者で構成される。この諮問機関はそれほど強い強制力はないが、ある都市計画の是非について議論を起こすこともある。後に Amsterdamse Raad voor de Stadsontwikkeling に改称。
- 62) 地下鉄と高速道路の建設によるニューマルクト地区の住宅の取り壊しが、住民運動により最小限に抑えられる形に変更され、1972 年には高架の高速道路建設の中止が決断された。ed. Allard Jolles, Erik Klusman, Ben Teunissen, *op.cit.*, pp. 124-125.
- 63) 場所の表記の確認は、アムステルダムの地図や計画地図をあつめた書籍、Marc Hameleers, *Kaarten van Amsterdam 1866-2000*, Gemeentearchief Amsterdam, 2002 を参照。
- 64) Hemriette Posthuma de Boer, *Concertgebouw and Royal Concertgebouw Orchestra Amsterdam*, Ludion, 2003, p. 27.
- 65) Max Pam, Een tram onder het Rijksmuseum door, *Vrij Nederland*, 24-1-1987.
- 66) SMA や ARCAM は AMP 改装計画に関する雑誌記事も収集しているが、これに関する記事は 1987 年ごろから見られはじめる。新聞ではフォルクスクラント紙、トラウ紙、NRC 紙、パロール紙の 4 紙 (以下 4 紙) に多く見られる。これらの 4 紙は AMP 特集を何度も組んでいる。年にもよるが、前記 4 紙中最も掲載回数が多いのはパロール紙で約 3~4.5 割、ついで NRC 紙が 2~4 割を占め、フォルクスクラント紙、トラウ紙はほぼ同程度の頻度で掲載されている。他紙では注 9) に挙げたもの等に掲載されている。参考に SM 図書館所蔵の AMP 改装計画に関する 1999 年迄の新聞記事の回数を集計してみる。[] 内の数字は前が 4 紙、後が他紙の合計。1987 年 [4/3]、1988 年 [17/2]、1989 年 [45/5]、1990 年 [11/2]、1991 年 [25/1]、1992 年 [23/3]、1993 年 [36/14]、1994 年 [36/7]、1995 年 [42/8]、1996 年 [31/9]、1997 年 [33/16]、1998 年 [22/10]、1999 年 [44/25]。
- 67) De Kortste snelweg van West-Europa *Het PAROOL*, 4-7-1987.
- 68) Max van Rooy, Op, ten strijde tegen een onherbergzame vlakte!, *NRC-Handelsblad*, 29-7-1987.
- 69) Max van Rooy, Verlenging inzendertijnd Museumplein-prijsvraag, *NRC-Handelsblad*, 19-8-1988.
- 71) ファン・ロイは AMP 空間がオランダにとって大切な場所なのに、計画のなまま放置されていたし、彼自身ムゼウム通りはアムステルダムを分断していると感じていたと述べる。また、オランダの新聞は読者に対して「最も醜い建築を選ぶコンペティション」や建築や都市計画への意見を求めることはあるが、彼の行ったような真剣な競技設計を新聞が主催することは当時としても珍しかったと述べている。面談 2006 年 9 月。
- 70) Arend Evenhuis, Plein gezocht en niet gevonden, *Trouw*, 3-11-1988.
- 72) ファン・ロイの製作した番組は 1999 年にテレビ局 AVRO で放映された。1988 年の NRC 紙による競技設計の入賞者、入賞はしなかったが興味深い提案者 (作曲家や森林愛護者、巨大駐車場案など)、またその後提案を出したハイネケン (ハイネケンビール専属の建築家が解説) ヴェバー、建築家 W. Arets、当時の SMA 館長フクス等が出演している。入賞作品は基本的に AMP 空間を開放的にしたオープンスペースとするものが選ばれている。水、緑、石など様々な素材で構成される空間や、夜になると光で広場が浮かび上がる案の他、旧自動車道を強調し現状を批判的に取り扱うものなどがある。また、鳥のための聖域とか、2000 人が鑑賞できる野外オペラハウス、パリのルーブル美術館の前のガラスのピラミッドを建てるべきだと述べる者もある。W. Arets はこの周りに高層ビルを建てたいと言い、フクスはサンティアゴにあるような広場がいいと述べる。また、エベリングの記憶によると OMA (オランダ語で oma はおばあさん) は自らの事務所名をもつて屋根の上に大きく OMA と書かれた高齢者用ケアハウスを提案し、他にオペラスクを建てる案もあったと述べている。
- 73) *Ideeen voor een plein 28 oktober- 27 november*, Stedelijk Museum, pp. 1-8. 競技設計の展覧会時に配布された新聞紙形式のパフレット。選評や入賞作が掲載されている。
- 74) フールトセンは、マーストリヒト市の歴史地区の都市計画に関りながら、当時の都心再生という理由のスクラップ&ビルドの風潮に対して、19 世紀後期に造られた都市空間の豊かさを訴える講演を方々で行っていた。オランダにとって 19 世紀の近代都市建設は短い期間であつたし、その価値の 1 つが皆が集まる為の広いパブリックスペースや都市緑地のネットワークだが 70 年代頃までは重要視されていなかったと述べている。
- 75) Frans Peeters, A.H. Heinekenplein, *Het PAROOL*, 1-4-1989.
- 76) Tanja van Bergen, Een echt contragewicht voor het Rijksmuseum, *Het PAROOL*, 13-6-1989.
- 77) Gerrit van der Plas, Amsterdam heeft de open ruimte van het Museumplein hard nodig, *Het PAROOL*, 28-8-1989.
- 78) Brieven Museumplein, *NRC-Handelsblad*, 23-6-1988 ではヴェバー案は CG 周辺にあまり配慮が見られず、この部分が祝福された空間 (ヴェバー自身の解説から引用し) となっていないと述べ、「ヴェバーが設計者として選ばれたことをどう思うか」という問いを 6 月 14 日にし、6 月 23 日の投稿欄に 2 名分の批判的な意見を載せている。また、Gerrit van der plas, Amsterdam heeft de open ruimte van het Museumplein hard nodig, *Het Parool*, 28-8-1989 は、建物を建てることでなく空間に配慮すべきだから、SM 拡張部がもう少し小さい方がいいと指摘している。
- 79) Annemiek Paping, Stedelijk en van Gogh willen uitbreiden- Grooste plannen voor Mu-

- seumplein. *Telegraaf*, 5-Okt-1989. に掲載された市の助役 M. Luimstra の見解。
- 80) アムステルダム市の行政区は 1981 年に Noord と Osdorp の 2 地区が導入されて以来、何度か分割再編が行われており、南区の発足した 1990 年には 10 以上の分割が行われた。現在は 14 の区とアムステルダム中央区が管轄する 1 地域の計 15 地区に分かれている。各区は以前の市が持っていた多くの権限を受け継いだ、その中には区内の建築物建設等や都市開発、文化政策等の権限も含まれている。
- 81) Amsterdam Stadsdeel Zuid, *Communicatieplan Herinrichting Museumplein*, Amsterdam Stadsdeel Zuid, 1994, p. 2. アムステルダム市アーカイブ所蔵。
- 82) ホスバーは 都市計画等の大規模な計画にも関わったことのあるランドスケープアーキテクトで、1997 年に他界した。
- 83) フールトセン、クロースによると、自分たちがアーバンデザイン、ランドスケープ、建築という異なる分野の専門家で、また大学、役所といったどの機関にも属さず、フリーランスで活動するものだということが重要だったと答えている。面談 2006 年 9 月。
- 84) ホスバーはすでに他界している為になわかつたが、残る諮問委員のフールトセンとクロースと面談した。この章の内容はその面談による。最終に残った候補者はアンデルソンとスペインの Beth Gali の 2 名だった。また、委員会は、アンデルソンの補佐をガル個人に頼んだという。フールトセンは彼が困難な仕事をやり遂げていることを知っていたので頼んだと述べ、ガルも彼が依頼された理由は AMP を必ず完成させるとい意思が南区と委員会にあったからだろうと述べている。
- 85) ARCAM は、1993 年の公開説明会の議事録やアンデルソン案に対して寄せられた意見を南区がまとめたものを所蔵している。その中には AMP 近辺の公的施設、商店、交通関係協会その他、市民運動化家や個人からの意見や質問がある。批判し、全く新たな案を提示するものもあれば、それほど否定的でないもの、質問、要望を伝えるものもある。1993 年に関してはそれらに対する、アンデルソンとガルからの返答も残されている。
- 86) Amsterdamse Raad voor de Stadsontwikkeling, *Over de STEDEBOUWKUNDIGE PLAN-NEEN VOOR HET MUSEUMPLEIN*, ARS-advies nr. 156, Amsterdam, 1993, p. 1. に諮問委員会としての 10 の意見 (結論) をまとめている。他の意見の概略は、3 今後各文化施設は AMP 上の遊歩道に何らかの繋がりを考えるべきだ。4 交通問題解決のために A'dam 市に追加資金を要請する。5. パス専用の駐車場の数の増加要求。7. 歩道と自転車道を確保すること。8. 将来的な地下鉄入口の位置を明記してほしい。9. 今後、国立博物館の拡張をする場合は AMP のデザインに配慮するべきだ。10. 旧市街地への車の入場制限法の成立に期待している。
- 87) アンデルソン案に関しては、図面や写真史料の他、ARCAM 所蔵の 1993 年 3 月 10、11 日に行われたマスタープランについての公開説明会の議事録や AMP 計画諮問委員との手紙のやりとり等の資料に加え、ガルからの聞き取りを行った。
- 88) ガルは、AMP 上の RM、CG からの既存の軸性に加え、最も大きく、またどこにも収まらない 3 本目の軸性を設けることで、パロックの軸性を打ち消したと述べている。3 本あればそれ以上のこの空間に及ぼす都市の要素からの軸線は絶対軸にはならない。加えて、これは非常に民主主義的とも言える空間性だが、これはアンデルソンの世代にとっては大切な意味があることで、とも述べている。
- 89) ガルは、例えば、黒川の VGM の新棟は、展示室だけでも、その形からはガスタンクかもしれない映画館にも見える。三角形のドンキーイヤーも、今は駐車場の入り口だけでも、店舗にも、休憩所にも、停留所にもなってしまうように、形がある事柄や意味を特定せず、見る人によってどのようにも理解の可能性がある点を指して、「抽象」、つまり「何でもなく、何にでもなれる」場所と説明した。
- 90) 黒川案との折衝については、フールトセン、クロース、ガルとの面談にて、ヴェンチュリー案との折衝についてはガルからの聞き取りによる。
- 91) 結局シザ案も 2002 年には立ち消え、2004 年の再度の競技設計で Benthem Crowel が選ばれた。今までの案は予算等を理由に棄却されているが、理由はそれだけではなく、色々な批判があつたことや、SMA 館長が、W. Beeren(1985-1993)、フクス(1993-2003)、H. van Beers (2003-2005) と 3 度変わったことも理由と考えられる。
- 92) 1993 年 3 月 10 日付けの SMA 館長フクスの意見には、ムゼウム通りの時と比べて (アンデルソンの) 計画の方向性は変化しておらず、またドンキーイヤーが SMA を AMP の外に押しやり、見えなくしていると述べている。ARCAM 所蔵。
- 93) 1996 年 2 月 9 日にアンデルソンが AMP 計画の諮問委員に協力を要請して宛てた手紙の内容。SMA と地下駐車場の開発業者の ING 銀行がシザにドンキーイヤーを無償でいいと許可しようとしたと記されている。またシザの駐車場の入口の代替案は高額であるうえに、駐車場としては効率の良い計画ではなく、初期に認められた予算内で行ってきたマスタープランや、計画を推進するために為に行った交渉や調整が総て台無しになる案だと記されている。また、代替案が受け入れられるとは考えにくく、市民に肯定的に受け入れられてきたマスタープランが実現しなかったら、市民の意志に反すると確信していると記されている。ARCAM 所蔵。
- 94) ガルより聞き取り。
- 95) Het nieuwe Museumplein, *Het PAROOL*, 22-8-1999.
- 96) 1993 年 3 月 10 日に行われたマスタープランについての公開説明会の議事録中の、「AMP は何か」という質問に対するアンデルソンの返答、p. 13、ARCAM 所蔵。また、ガルは聞き取りにて、AMP をあえて言い表すなら「フィールド」と表現した。

図版出典

Fig. 1 Stedelijk Museum, *opnieuw stedelijk museum*, 2006, the cover.Fig. 2 ed. Allard Jolles, *op.cit.*, 1974, p. 92. に筆者が加筆。Fig. 3 Simon Sadler, *op.cit.*, p. 21.Fig. 4 Mark Wigley, *op.cit.*, p. 180.Fig. 5, 6, 7, 8, 9 Hans Ebberink, Birgitte de Maar, *op.cit.*, p. 42, p. 47, p. 51.Fig. 8 Amsterdam Stadsdeel Zuid, *op.cit.*, p. 9.Fig. 9 Hans Ebberink & Birgitte de Maar, *op.cit.*, p. 37.

Fig. 10 筆者撮影 2005.

Fig. 11 *Ideeen voor een plein 28 oktober- 27 november Stedelijk Museum*, pp. 2-3 より抜粋。1988 年の競技設計の展覧時に配布された、競技設計の結果や審査員評の載った冊子。Fig. 12 Arend Evenhuis, Plein gezocht en niet gevonden, *Trouw*, 3-11-1988.Fig. 13 Frans Peeters, A.H. Heinekenplein, *Het PAROOL*, 1-4-1989.

Fig. 14 de Architecten Cie, MUSEUMPLEIN, May 1989. C. Weeber 案原本の複写。

ARCAM 所蔵。

Fig. 15 Weeber neemt plan voor Museumplein rommelig, *Het PAROOL*, 4-12-1990.Fig. 16 Hemme Battjes, *Het Museumplein*, Stadsdeel Zuid, 1996, p. 12 に筆者が加筆。

(2006 年 7 月 10 日原稿受理, 2007 年 3 月 6 日採用決定)